



アメリカ童話から

12

きげんの悪い鷺鳥

松原至大

あるところに、羽のおばあさん鷺鳥がいました。名をオーガスタといいました。ある日のこと、目を覚ますと、とても御きげんが悪いのでした。

朝のお食事に、まるまるとしたい虫を食べたいと思いました。それから青ばえも。そこへ小さなひよ子が出て来て、それを一匹食べようとしますと、オーガスタ鷺鳥は、

「があ。」と、大きな声を出して、羽根ではたきました。

小さなひよ子はびつくりして、

「びよ、びよ。」と泣いて、お母さんにはとよ鶏のところへ逃げて行きました。

オーガスタ鷺鳥は、大きなお池に行きました。そして冷たい水をたくさん飲んでから、自分のきれいな羽根をひるげて、水にうつしていました。そこへ豚の子供が一匹、近かずきました。

すると、オーガスタ鷺鳥は、また

「があ。」と、大きな声を出して、「あつちへお行き。」と言いました。それから長い首をさしのべて、豚の子供のくるくると巻いた尾の先を、口にくわえました。

子豚はびつくりして、

「きい、きい、きい。」と泣きながら、お母さん豚のところへ逃げて行きました。オーガスタ鷺鳥は、豚の子供の氣持ちばかりか、その尾にも傷をつけてしまいました。

お母さん鷺と、お父さん鷺と、おばさん鷺と、おじさん豚と、それから三人きようだいの七面鳥が、そこへかけつけました。オーガスタ鷺鳥は、くちばしを上にして、まだ水鏡に姿をうつしていました。

「こつ、こつ、こつ、お前さんは、御自分のことを、なんと思つてるの？」と、お母さん鷺が聞きました。

「王さまですか？ お役人ですか？ それとも映画のスター？」

オーガスタ鷺鳥は、お母さん鷺とそのお友だちの方を、じろりと見ましたが、なにも言いませんでした。みんなに向つて、舌をぴろりと出しました。

そこでお母さん鷺と、お父さん鷺と、おばさん鷺と、おじさん豚と、それから七面鳥のきようだいは、犬のローヴァをたずねて、オーガスタ鷺鳥を、その広場から追い出すことにきめました。

「あんな御きげんの悪いおばあさんは、ここにいってもらいたくない。」と、犬のローヴァは大きな声でほえ立てました。

オーガスタ鷺鳥は、こうしてみんなに追い立てられましたが、平氣でほこりつばい道を、よたよたと歩いて行きました。一度も後をふり返りません。

間もなく、兎の長耳がいる草むらのところに来ました。そして

「があ。」と言つて、また羽根をひろげて、兎の方に首を突き出しました。まだ御きげんがなおらないのでした。兎の長耳は、飛ぶように森の中にかくれました。オーガスタ鷺鳥も、森の中にはいりました。

「なにかおひるの御馳走が、見つかるだろう。」と、思つたのでした。けれどなに一つ、見つかりません。やがて、赤い実のなつたやぶのところに来ました。

「これをとつてやるう。」と、怒おこばつて言いました。けれど、それにはくちばしとどきません。

りす、しまりす、やまあらしが、そばを通りました。でも、一匹として、言葉をかけるものがありません。オーガスタ鷺鳥はさびしくなりました。そしてはずかしくなりました。

「私がむくれていたからかしら？——大分だいぶね。」と思いました。

そのうちに、雷がなりました。そしてものすごい雨が降つてきました。オーガスタ鷺鳥は、木の下にかくれました。羽根がびしょびしょにぬれました。それなのに、まだひとりぼつちです。あの広場がなつかしくなりました。

「私はむくれていたのかしら？——ほんのちよつぱりね。」と、ひとり言ひとりごをいいました。

「ほう、ほうろうらう。」と、鼻はなが木の上で、大きな声を出しました。オーガスタ鷺鳥は、びつくりして、とびあがりました。頭の上をにわかよこよこに蝙蝠こぶたがとびました。オーガスタ鷺鳥は、またとびあがりました。

やがてオーガスタ鷺鳥は、森を逃げ出しました。後を見ながら、こわごと。

「私はむくれていたんだよ。——とても不きげんでね。」と、はじめてはつきり言いました。

お母さん鶏と、お父さん鶏と、ひよ子たちと、おじさん豚と、子供の豚と、おばさん鷺あひと、七面鳥のきょうだいと、犬のローヴァは、オーガスタが広場へかけこんでくるのを見て、みんなでにらみつけました。

オーガスタ鷺鳥は、首ががつくり垂たれて、きまり悪そうに言いました。

「私がむくれていて、悪うございました。かんにんして下さい。またお友だちになつて下さいませんか？」  
そこで、みんなは御きげんをおしました。にらみつけていたみんなの顔が、またにこにこになりました。

(ルース・ディクソン女史の作による)